

## メリメを通して見た近代日本文学空間のありかた : 漱石、鏡花、三重吉、芥川、堀、三島の場合

高木, 雅恵

<https://doi.org/10.15017/1654607>

---

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (比較社会文化), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏 名 : 高 木 雅 恵

論 文 名 : メリメを通してみた近代日本文学空間のありかた  
— 漱石、鏡花、三重吉、芥川、堀、三島の場合

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

明治期に始まる文明開化は、近代日本の文学の場において如何なるものであったのか、鷗外によって西洋からもたらされたメリメを通して、夏目漱石、泉鏡花、鈴木三重吉、芥川龍之介、堀辰雄、三島由紀夫が、それぞれのありかたで近代の文学空間を成した様を見ている。

第一章では漱石とメリメについて考察した。近代文学の幕開けにも位置付けられる漱石の『吾輩は猫である』には、西洋にある言葉や概念を日本の「近代」に移し替える過程が示されている。漱石がメリメ作品に着目したのは『カルメン』の水浴場面であり、西洋における固有の文化として、鐘の音や習慣により本質を見失う過ち、また、ギリシャ・ローマ神話を背景とした絵画芸術や芸術表現における本来あるべき意味表出の逆転現象、そこに表現された美女の裸体や公衆浴場を見出し、日本の文化と照らし合わせ、置き換える手法を『吾輩は猫である』において行っていた。公衆浴場を目にする「猫」の視点は、『吾輩は猫である』においても男湯を目にする吾輩である猫の視点で表『カルメン』の水浴場面の猫でもある吾輩を、夏目漱石は『古事記』の太安万侶の位置におき、『古事記』の「朕」に対応する珍野苦紗弥の周りで起こる出来事を、明治期に新たに表現した作品が『吾輩は猫である』と考えられることも確認できた。メリメの『カルメン』は、多くの点において『吾輩は猫である』の作品構成そのものにも関わっていると考えられることが明らかとなった由紀夫は現され、『カルメン』の水浴場面の猫でもある吾輩を、夏目漱石は『古事記』の太安万侶の位置におき、『古事記』の「朕」に対応する珍野苦紗弥の周りで起こる出来事を、明治期に新たに表現した作品が『吾輩は猫である』と考えられることも確認できた。メリメの『カルメン』は、多くの点において『吾輩は猫である』の作品構成そのものにも関わっていると考えられることが明らかとなった。また、漱石は『吾輩は猫である』において、西田幾多郎に先駆け、禪的世界観を、金沢出身の友、米山保三郎によって禅師であり哲学者である独仙として表現していることも確認した。

第二章では泉鏡花とメリメについて考察した。共に幻想文学と位置付けられる作品を書き、ファム・ファタルを描き出していることから、直接受容とは異なる角度から考察した。鏡花とメリメは、芸術的モチーフとして水浴の美女を描くにあたって、ファム・ファタルとして共通した表現方法を採っていた。鏡花とメリメは異なる文化的背景にありながら、追究した問題は等しく、同じ文学空間にあった。鏡花とメリメは、文化的背景を越えて通じ合う文学世界空間における出会いであった。

第三章では、三重吉におけるメリメについては、自らの雑誌に掲載した『マテオ・ファルコーネ』を漱石の解釈に等しい解釈によって日本文化に置き換えた再話と、原作に忠実でありながら作品最終部における死の表現を改変した再話があり、漱石によって近代日本に見出されたメリメは、三重吉によって次なる近代の文学空間に受け継がれた。

第四章では、芥川龍之介と谷崎潤一郎との間で展開された「小説の筋」論争をメリメから分析した。芥川が自らの死の直前に谷崎に送ったメリメの『コロンバ』は「見る」意識が最も顕れていると考えられる作品であり、芥川が自らを表現した「見る」が表現されている作品であった。芥川が「小説の筋」論争で示そうとした「詩的精神」としての作品がメリメの『コロンバ』であったと考

えられることを検証した。

第五章は芥川を師と仰いだ堀辰雄におけるメリメについて考察した。堀はメリメに通じる「見る」存在であった芥川の目を自らの目とし、芥川の選り取ったメリメを自らの作品と化すことによって堀は芥川の死を乗り越えようとしたことを見た。

第六章は三島由紀夫とメリメで考察した。芥川から堀辰雄に受け継がれたメリメに模範的位置を与え、文学的位置付け及び作家の位置付けにおいてメリメを高く評価し、三島作品への影響が明確にあったことを確認した。三島由紀夫にとって自らの死にも関わるとされる『憂国』においても「死」と「美」をメリメに負って模範としていたことが認められた。

近代日本が対峙したメリメを自らの文学世界において昇華し、文学空間が形成される様を見た。メリメの考察に伴って「死」を見ることにもなったが、メリメは人文主義的な自由主義思想家としての「死」を描いていた。それは古代ギリシャ思想に通じるものであり、端緒に虚無を置く禅的世界にも通じ、ここに見てきた作品世界と呼応していた。近代の日本においてメリメがどのような形で受け入れられ、文学空間を成してきたのか、その一端を明らかにした論となっている。